「巨大城下町・江戸の社会的結合」（報告要旨にかえて）

吉田　伸之

「メトロポリタン史学会の創立大会にあたり、何か報告せよ」との小谷汪之氏の一言から、こうした羽目（報告の文章化！）に陥ってしまった。尊敬してやまぬ先輩からの「命令」に常に従順であろうと努力してきたが、今回は全くの準備不足で大会当日に臨まざるを得ず、大会直前に公表された拙稿「伝統都市の終焉」（『日本史講座』七巻、東京大学出版会、二〇〇五年）の未熟な内容についてふれながら、「歴史のなかの大都市」へと向かう視座や方法について若干コメントすることでお茶を濁さざるをえなかった。従って、当日の報告内容をそのまま忠実に文章化すると、その大半は前掲拙稿のくり返しとなってしまう。そこで具体的な論点については拙稿をお読みいただくとして、ここでは報告要旨にかえて、拙稿の方法的前提や、その後考えている二・三の点について付記することでお許しいただきたい。

1.

拙稿「伝統都市の終焉」は、江戸を素材として、日本の近世が固有に創出した伝統都市類型＝城下町の解体への道のりを、特に町人地社会における社会的結合の中軸にあるところの、仲間や組合とよばれた共同組織の動向にスポットをあてて描こうと試みたものである。この論文では方法として次の二つを前提とした。第一は「伝統都市」論である。これは都市の歴史を、伝統都市―近代都市―現代都市というような三分法によって捉えようとする、時代区分的な類型論である。ここでポイントとなるのは現代都市類型である。これは、一九世紀の第四・四半紀に北米大陸において生まれた都

市類型であり、高度な資本主義システムの下に単一化を遂げた市民社会を基盤とする点に特質を有す。現代都市はこうして当初は特殊なものであったが、高度資本主義世界システムと共に二〇世紀の過程で地球的規模に「普及」して、二一世紀初頭においては最も普遍的な都市類型となったものである。それらは、摩天楼とスラム、無機的道路空間の横溢と大気汚染、画一的な生活様式と大量消費など、無個性的な相貌をもつ点に大きな特徴がある。

一方、伝統都市はその対極に存在する。これは世界各地の前近代社会において、古代以来からのものを含めて膨大な時間の堆積の上に形成された多様で個性的な諸都市を包括的に呼ぶものである。これらにはすでに廃墟となったものもあり、また現代都市の内部に石化したかたちで存続するものもある。例えば、日本の場合、伝統都市の最も主要な形態の一つは都城であり、今一つは城下町である。都城は廃墟と化し、城下町は各地で現代都市の中心部に骨化して伝存する。伝統都市の特徴は、社会的結合や空間構成における分節性、非均一性、複層性等々であり、その基盤には、自然＝大地に全面的に依存する素朴な生産様式がある。そして近代都市とは、こうした多様な伝統都市が現代都市へと解体・改造・再編されてゆく過渡期の段階のものとして想定しうる。そこで社会の骨格としてあるのは「複層的市民社会」（東条由紀彦『製糸同盟の女工登録制度』東京大学出版会、一九九〇年）であり、前資本主義的な小経営の健在であり、さらには鞏固に残る差異的分節構造であったりする。

2.

第二の方法的前提は、「分節的な社会＝空間構造」論、すなわち「分節構造論」である。この議論の前提には、一つには塚田孝氏による「重層と複合」論（『近世日本身分制の研究』兵庫部落問題研究所、一九八七年）がある。塚田氏は、日本の近世においては社会集団＝共同組織の「重層と複合」により全体社会が構成されると論じた。重層とは、村や町のような基礎的な社会集団が、二次的・三次的により上位の集団を形成してゆくような関係を、また複合とは、異種の社会

集団間の交流・関係の側面をいう。二つには、二宮宏之氏によって紹介・展開された社会的結合（ソシアビリテ）論を多分に意識したことである。この点については後述したい。分節構造論というのは、こうした議論を前提とはするものの、江戸という巨大な城下町の社会構造や、それと密接な関係にある空間構成の個々の要素に関する個別研究から、帰納的に導き出された方法である。これは次のような内容からなっている。

①江戸では、幕府権力の所在地＝城郭を中心とし、大名の藩邸・旗本屋敷・御家人屋敷・組屋敷などからなる武家地、多数の町共同体が集中する町人地、大規模寺院・神社や寺町、そして中小寺社からなる寺社地、えた町村など、諸身分集団が居住空間域ごとに区分され、これと相即しつつ、全体として即自的な分節構造を形づくる。

②右のうち、とくに町人地の社会においては、複雑に発達をとげた分業関係や職分、またその基盤にある小経営の成熟を基礎として、仲間・組合・組・講中・連など、多様な社会的結合が簇生する。これらは町という地縁的な小共同体の枠組を超え広域に展開し、部分的には武家地・寺社地の一部にまで浸潤するに至る。これも即自的な分節構造の一形態と考えられる。

③一方、①・②とは異なる位相において、大店や市場仲間などの社会的権力が磁極＝ヘゲモニー主体となって、とくに②の部分における周辺の社会的結合を人格的、また経済的に統合・編成した結果形成される、いわば対自的な分節構造が存立する。

④しかし、②でみた多様な社会的結合は、社会的権力によって充全に統合・編成されるものではありえない。そこでは特に「日用」層、逸脱的社会層に足場を置く諸集団、またアウトロー的部分において、③とは対抗的に民衆世界を構造化せしむる要素、すなわち対抗的な「権威」が広く形成された。

3.

さて右で述べた分節構造という伝統都市社会の分析視角・方法は、フランス絶対王制期の社会史を論ぜられる二宮宏之氏によって紹介・展開された、社会的結合＝ソシアビリテ論と近似的な側面をもつように思われる。氏は「フランス絶対王制期の統治構造」（二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社、一九八六年）と題する有名な論文において、フランス革命以前の十七・十八世紀フランス絶対王制期における権力秩序と社会的結合関係との相即構造について論じた。そこで氏は、この時期のフランス国家は、一見すると中央集権的統一国家の相貌を呈するが、伝統的社会の構造に深く拘束され、これに適合的な権力秩序が形成されたこと、そして「家」を起点とする社会的結合関係にまで降りたって、権力秩序の機能を捉えなおすことの重要性を指摘された。さらに、二つの絆の契機―空間的・地縁的結合と機能的・職能的結合―によって形成される「自然生的」結合関係の一般的定在と、これらの中で王権によって法人格を付与された、対自的に捉えかえされた社会的結合としての社会集団を、「社団」（「中間団体」）と定義した。また一方には、こうした社団的編成から排除され、自然生的な結合関係からも疎外された大量の非市民層・貧民層を「周縁的」社会層として位置づけるものである。こうした見取り図にもとづく氏自身によるモノグラフや全体史の叙述は未見であるが、前述した分節構造論と親和的であるのは瞭然としている。その差異をみると、とりあえず以下のようになるのではないか。

第一に、前述のように日本近世史、とくに身分論や都市社会史において、実証・帰納的に抽出されてきた「重層と複合」論や分節構造論は、社会レベルの構造把握にとどまっており、権力との連接関係、あるいは権力秩序の側面を包括した方法としてはまだ未熟であると考える。

第二は、一方の社会的結合論は、国家―社団―非・社団―「周縁」的社会層という関係構造論にとどまっているようにみうける。この点では中野隆生氏が、「絡みあう諸関係の総和が織りなす広がり」を枠として、こうした「空間的限定を

ともなった人びとの自律的まとまり」を「ローカルなレヴェル」において解明することの重要性を指摘した点が想起される。（中野隆生「『ソシアビリテ＝社会的結合』論の二〇年」歴史学研究会編『国家像・社会像の変貌』青木書店、二〇〇三年）

4.

さいごに、江戸の都市社会史を念頭に置きながら、「絡みあう諸関係の総和が織りなす広がり」としての場の叙述にむけて、方法的なイメージをのべておきたい。

手元にある史料から、次のような例を一つあげてみよう。

（端裏封表書）
「台河岸　十花村
五木田宗右衛門様　山崎又市
貴下　」

以手紙啓上仕候、秋冷之砌御座候得共愈御勇健之由珍重御儀奉存候、然者当村地頭所早米白米弐俵四斗壱升入、其御河岸へ出し候間、瀬戸越しニ而御積送り可被下候、当年ハ御屋敷直納ニ相成候間、四斗納メ不切様御申付御納メ可被下候

牛込揚場ゟ小日向馬場
建部伝右衛門様　トの
御役人中様

右送り状ニ而御送り可被下候、且運賃内金壱朱也、此ものニ差遣候間御受取可被下候、尤揚場ゟ御屋敷迄の車力

ハ何程ニ候哉相分り不申候間、此度ハ先払之積りニ御認メ可被下候、右得貴意度如此御座候、以上

八月廿八日

追而当月限り直上納之旨被仰付置候義ニ御座候間、今日瀬戸船ニ御積出し被下候様奉願候、若其御河岸ニ便舟無之候ハヽ、外河岸御尋被下候而成共、今日中御積送り被下候様くれ〳〵も奉願候、以上

（『千葉県の歴史』近世資料編・下総二、五九五号史料。県立関宿城博物館所蔵五木田家文書。）

右の近世後期とみられる年欠の史料は、下総国豊田部十花（じゅうか）村名主の山崎又市が、水海道台河岸の河岸問屋・五木田宗右衛門にあてた書状である。十花村の知行主は旗本酒井氏（五八三・七石余）と建部氏（一七四・六石余）の相給であるが、この内、建部氏の役人からの命令で、この年の「早米」（早目に上納する年貢米か）を二俵、十花村名主が江戸の建部屋敷にあてて直接送り出したとき、五木田に対して送り方について具体的な依頼をしているものである。この時の米の運搬にかかわる人々とポイントとなる場をみると、概略以下のようになる。

十花村（名主）→馬での輸送（駄賃稼ぎ）→水海道台河岸（河岸問屋）→鬼怒川（高瀬船）→中利根川・瀬戸河岸で荷揚げし、陸送（小場人足・駄賃稼ぎ）→江戸川・今上河岸（高瀬船）→江戸・奥川筋船積問屋→艀下（艀下宿と舟乗）→牛込揚場（小揚人足）→大八車での陸送（車屋と車力＝仕手方（してかた））→建部屋敷

一個の旗本が支配地からわずかな年貢米を送らせることで、江戸と周辺地域を結ぶ右のような「絡みあう諸関係」の連鎖が浮び上がってくる。そして、村、駄賃稼ぎ、河岸問屋、船持、船頭、水主、艀下宿、艀下、小揚人足、車屋、仕手方など、それぞれの局面の基盤には、年貢米輸送に関わるいくつかの位相からなる諸集団がぶ厚く展開するのである。こうして、巨大城下町江戸と周辺の在地社会や町場をつらぬいて形成される構造連鎖の全体像を、その基盤にある諸集団＝社会的結合を軸にして描くことが重要となるのではなかろうか。そして有意味な枠組において、こうした連鎖の全体構造の一端を精緻に叙述するには、社会レベルにおいて固有の磁場を構成するヘゲモニー＝社会的権力と、一方で、権力秩序との連接関係とを同時にみながら分析を深めることが前提となるように思われるのである。

（付記）

小稿の内容との関連で、左記の拙稿をご参照いただければ幸いである。

・吉田伸之『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、二〇〇〇年。
・吉田伸之「城下町の構造と展開」佐藤信・吉田編『都市社会史』新体系日本史6、山川出版社、二〇〇一年。